

全国鳥類繁殖分布調査

ニュースレター 第12号

2018年 7月 24日



ウミネコ(加藤 匠)

現地調査のお礼と調査結果の送付のお願い

繁殖期が終わり、調査データが続々と集まっています。今年送付いただいたデータは300コースを超え、昨年までのデータとあわせると調査できたコースは1,500コースを超えました。まだ調査結果をお送りいただいていない方は、早めの調査結果の送付をお願いします。

送付はこちらのページから <http://www.bird-atlas.jp/mpmailec/form.cgi>

65%の調査コースの調査が終了

調査へのご協力ありがとうございます。7/23現在、1,507コースの調査結果が届いています。これは全コースの65%にあたります。宮城県、福井県、香川県では全コースの調査が終わり、ほぼ終わっている県はほかにも多く出てきています。昨年は滋賀県で分布図作成のワークショップを行ないましたが、今年も調査の進んでいる県、何県かで実施したいと思っています。

表1 調査責任者決定率と実施率の低い都道府県

| 調査責任者決定率 | 調査実施率 |
|-----------|------------|
| 群馬県 67.5% | 群馬県 32.5% |
| 福岡県 68.4% | 宮崎県 40.5% |
| 岩手県 69.0% | 徳島県 42.9% |
| 徳島県 71.4% | 高知県 44.4% |
| 福島県 72.5% | 鳥取県 44.4% |
| 高知県 73.3% | 山形県 45.1% |
| 北海道 77.2% | 岩手県 45.2% |
| 青森県 77.8% | 鹿児島県 51.3% |
| 京都府 81.0% | 千葉県 52.5% |
| 長崎県 81.0% | 北海道 54.0% |

反面、まだ調査地の登録や実施があまり進んでいない地域もあります。そうした地域を表1にまとめました。

早いもので、繁殖分布調査も今年で3年目。現地調査は、あと2年を残すのみです。来年にできるだけ多くの調査地を実施し、最終年度にやり残した場所を実施するというようにしたいと思います。

そのため、秋頃に、責任者登録いただいたけれども、まだ調査をできていない方へ来年/再来年の実施の可否の問い合わせをし、それを踏まえて、冬には調査責任者の決まっていないコースの登録のお願いをさせていただきます。ご協力、よろしくお願ひいたします。



図1 調査の実施状況。黒線が調査実施済みのコース、青が責任者の決まったコース、赤が決まっていないコース。

イソヒヨドリ・ガビチョウ ホンセイインコの分布変化

今年のゴールデンウィークに実施した調査にたくさんの情報をお寄せいただきありがとうございました。イソヒヨドリの内陸部への進出状況、ガビチョウやホンセイインコの分布拡大と利用環境の変化などが見えてきました。



イソヒヨドリ(大橋譲治)

全国鳥類繁殖分布調査のサイドイベントとして、ゴールデンウィークに開催したイソヒヨドリ・ガビチョウ・ホンセイインコ調査に207名の方から416件のデータをいただきました。調査にご協力いただいた皆様、告知にご協力いただいた都市鳥研究会の柴田佳秀さん、ありがとうございました。

この調査は、ゴールデンウィークにみなさんが訪れるであろう山やショッピングセンターなどで見られそうな鳥の中から、分布変化が顕著な鳥ということでこれら3種を選び、情報収集しました。このデータに、2016年以降に全国鳥類繁殖分布調査に寄せられている情報やバードリサーチの野鳥観察データベース「フィールドノート(さえずりナビ)」に登録いただいたデータを加え、分布の変化をまとめてみました。

イソヒヨドリ

1990年代は全国の海岸沿いに生息する鳥でした。それが今回の結果ではかなり内陸でも普通に見られるようになってきました。特に近畿から関東にかけて進出が顕著でした(図1)。

今回の調査で寄せられたデータとフィールドノートに

- :繁殖を確認, ●:繁殖の可能性あり, ●:生息確認, ●:周囲では繁殖していない

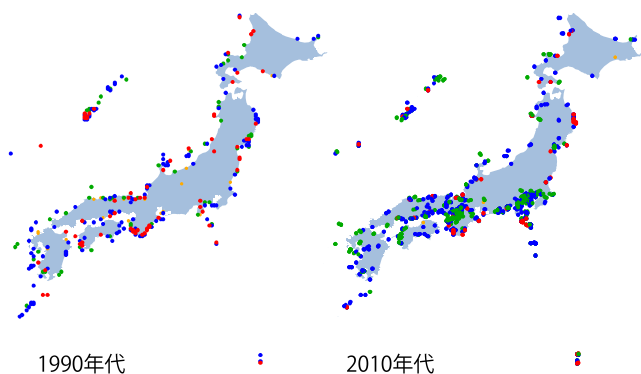


図1 イソヒヨドリの分布変化(全国)

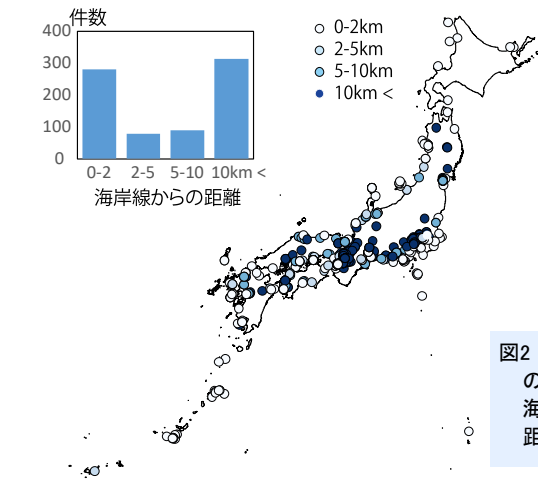


図2 イソヒヨドリの観察地点の海岸線からの距離

登録いただいたデータを基に海岸からの距離を測ってみました。海岸近く(海岸から0-2km)の記録も多いのですが、なんと10km以上内陸の記録が最も多かったです(図2)。もちろん「そうした記録を積極的に送ってくれているから」という偏りは当然あるのですが、全国的に内陸への進出が進んでいる様子うかがえます。

北海道については海岸からの記録のみでした。もし内陸での観察があればお知らせください。

ガビチョウ

これまでも全国鳥類繁殖分布調査の年報等で報告してきましたが、南東北、関東から中部、九州で分布して

- :繁殖を確認, ●:繁殖の可能性あり, ●:生息確認, ●:周囲では繁殖していない

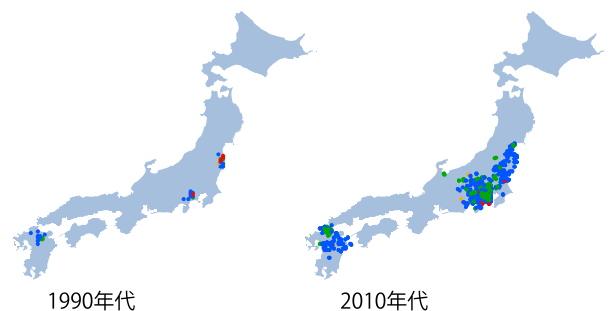
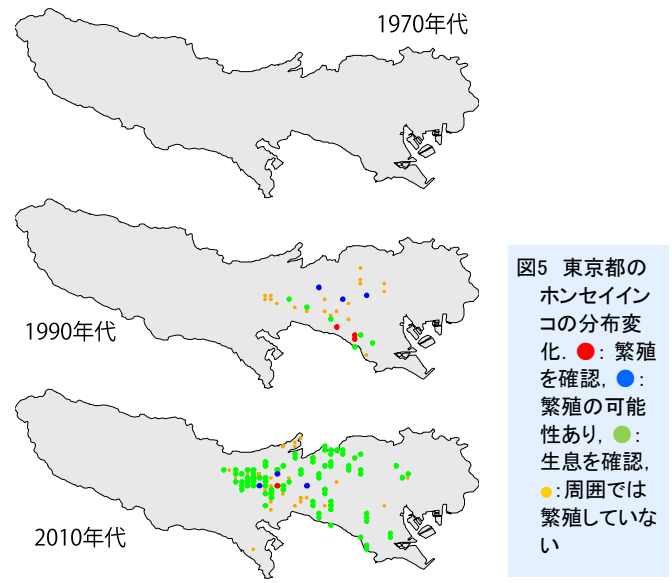
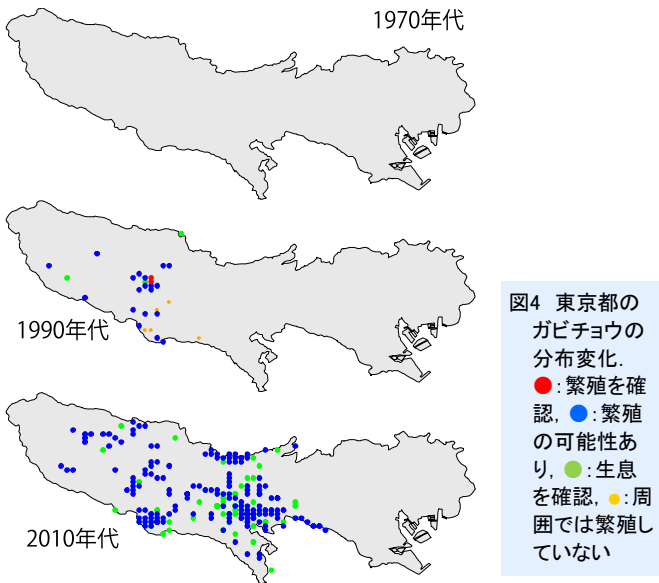


図3 ガビチョウの分布変化(全国)



市街地でも繁殖するようになったイソヒヨドリ(大谷吉次), 分布を拡大しているガビチョウ(長塚美代子), ホンセイインコ(松平晶子)



いたのが、その地域を核に分布を拡げ、東北と関東は、ほぼ繋がってしまったことを、さらに多くのデータを基に示すことができました(図3)。東京では丘陵部の樹林帯にのみ分布し、平地部では見られなかったのですが、現在は平地部の住宅地にある小規模な林でも見られるようになっていました(図4)。

ホンセイインコ

全国的にも東京圏でのみ記録されていました。国立環境研究所の「侵入生物データベース」によると、以前は、愛知、京都、広島でも繁殖していたそうです。しかし、それらの地域ではもう見られなくなってしまったようです。

東京の分布をみると、1990年代と比べて北側へ、そして西側へと分布を拡げているだけでなく、1990年代は、飛んでいることを観察されることが多く、周辺では繁殖しないと考えられる●の記録が多かったのが、樹木等に

降りているのを観察することが多くなり繁殖の可能性のある●の記録が増えています(図5)。高い木の洞に営巣するため、繁殖の確認は難しいものの、これらの場所で繁殖している個体も増えているのではと思われます。

今回はこれらの3種について情報収集をしましたが、ほかにも分布が変化している鳥は多くいます。ぜひ、ほかの種についても分布調査のフォームや「いきものログ」の特設サイトから情報提供をお願いします。また、バードリサーチの「フィールドノート(さえずりナビ)」で記録いただいた情報も分布図に反映されます。入力もスマホからできて、使いやすくなっていますので、お試しいただき、ぜひ普段の観察結果を記録してください。

情報送信フォーム: <http://www.bird-atlas.jp/bbaq.html>
いきものログ: <http://www.bird-atlas.jp/data/kirogu.pdf>
さえずりナビ: <https://db3.bird-research.jp/saezuri/record>

【植田睦之】

優占種の90年代からの変化

1990年代と今回の調査結果を優占種に注目して集計してみました。優占種の上位種はヒヨドリ、ウグイス、スズメ、ホオジロの順で変化はありませんでしたが、90年代は上位10種に入っていなかったキビタキが5位に入る大きな変化がありました。ウグイスは順位こそ変わらないものの、低地では増加しており、山地では減少している場所も多くありました。



スズメ(山口カ弘)

今年、調査責任者が決まっていない伊豆や山梨、群馬の調査地をまわってきました。調査地をめぐっていると、シカの姿が目につきます。そしてそのシカの摂食により林床がスッキリしてしまっています(図1)。



図1 下層植生がなくなった伊豆半島の調査地

そんな場所では、1990年代の調査では優占種だったウグイスがわずかししか記録できなくなっていました。また、畑が放棄され、藪化してしまい、90年代優占種だったスズメがほとんど見られない場所もありました。

優占種の変化は？

こうした優占種の変化が各地で起きているのでは、と、集計してみました。

まず、1990年代と今回で調査コースの変更の軽微な場所を対象に各調査地の個体数の上位3種を抽出しました。そして、種別に何地点が上位に入っていたかを集計してみました。

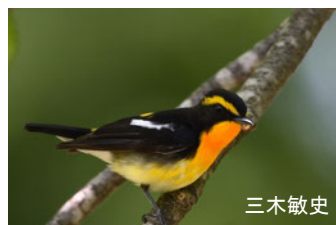
その結果、期待とは違い、優占種の上位種は、1990年代、今回ともに変わらず、ヒヨドリ、ウグイス、スズメ、ホオジロで、順位変化もありませんでした。ただ、その次にランクされたキビタキは前回から大きく上昇していて、上

表1 優占種の1990年代と今回の比較

| 2016- 種名 | 各順位の地点数 | | | | 1997-2002 種名 | 各順位の地点数 | | |
|-------------|---------|-----|-----|---|-----------------|---------|-----|-----|
| | 1 | 2 | 3 | | | 1 | 2 | 3 |
| ヒヨドリ | 351 | 149 | 82 | ← | ヒヨドリ | 274 | 153 | 96 |
| ウグイス | 143 | 168 | 111 | ← | ウグイス | 140 | 149 | 103 |
| スズメ | 140 | 84 | 44 | ← | スズメ | 160 | 83 | 48 |
| ホオジロ | 35 | 68 | 74 | ← | ホオジロ | 51 | 71 | 115 |
| キビタキ | 25 | 53 | 70 | ↑ | ツバメ | 46 | 64 | 58 |
| ツバメ | 22 | 47 | 41 | ↓ | シジュウカラ | 31 | 38 | 53 |
| シジュウカラ | 13 | 36 | 56 | ↓ | カワラヒワ | 26 | 38 | 46 |
| カワラヒワ | 18 | 28 | 56 | ↓ | メジロ | 25 | 39 | 44 |
| キジバト | 11 | 38 | 48 | ↑ | ムクドリ | 26 | 38 | 22 |
| メジロ | 20 | 40 | 35 | ↓ | エナガ | 24 | 23 | 33 |

位に入った地点数は前回の74地点から148地点に増加していました。キビタキの分布が広がっていることは、過去のニュースでも報告してきましたが、個体数も大きく増加しているようです。前回か今回かいずれかの年にキビタキが10羽以上記録された調査地を対象にその増減率を見てみると、全国的に50%以上の増加、あるいは100%以上の増加がみられており、大きく減少した場所は北海道で目立つ以外はごく僅かでした(図2)。

キビタキより下の順位の鳥を見ても、順位変動を伴う大きな優占種の変化はありませんでした。しかし全体では変わらなくても地域や環境によっては変化している可能性もあります。そこで増減が気になったウグイスについて、もう少し細かく見てみます。

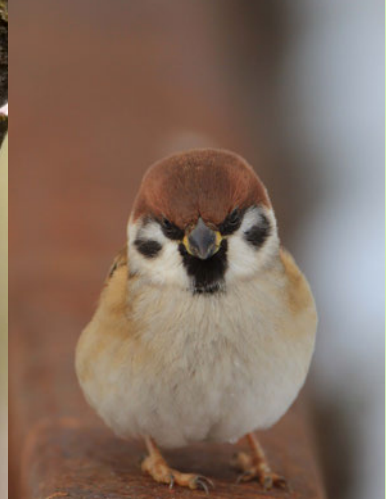


三木敏史

図2 キビタキの大きな増減が見られた調査地の分布。

- : 100%以上の増加,
- : 50%以上の増加,
- : 50%以上の減少,
- : 75%以上の減少





優占種上位のヒヨドリ(大橋謙治), ウグイス(磯海弘子), そしてスズメ(藤井 薫)

山地で減少し、低地で増加しているウグイス

前回か今回かいずれかの年にウグイスが10羽以上記録された調査地を対象にその増減率を地図に落としてみました(図3)。赤系の「減少した場所」、青系の「増加した場所」がそれぞれ固まって存在しています。平野部で増加が目立つように見えたので、標高別に増減を集計してみると、標高100m未満の低地では、半数以上の調査地で増加しており、100m以上の山地では、減少している場所も多いのがわかりました(図4)。



豊田敏則

図3 ウグイスの大きな増減が見られた調査地の分布。

- : 100%以上の増加,
- : 50%以上の増加,
- : 50%以上の減少,
- : 75%以上の減少

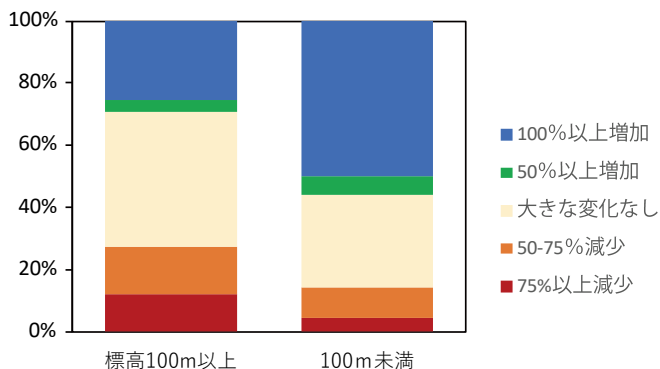
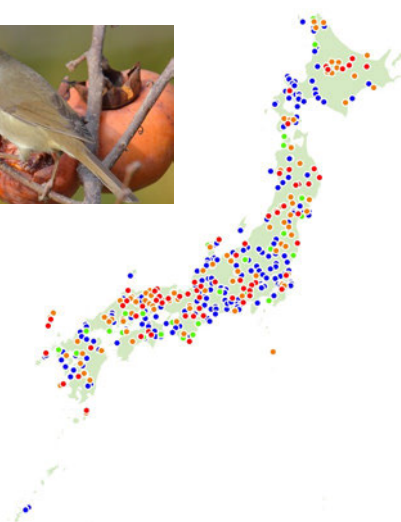


図4 ウグイスの増減の標高別の違い

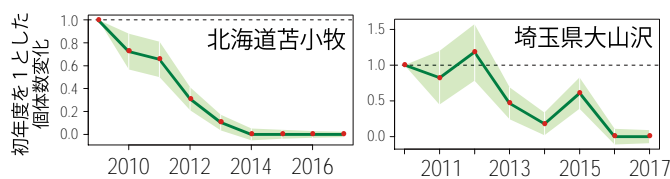


図5 北海道苫小牧と埼玉県大山沢におけるウグイスの減少。モニタリングサイト1000の調査結果に基づく

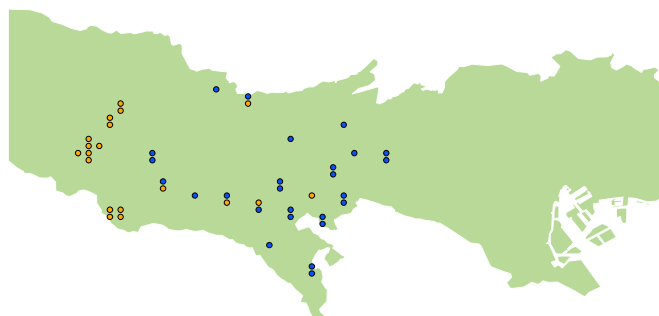


図6 東京都で新たにウグイスが記録された場所(●)と、前回も記録された場所(●)。東部の平地部で新たな記録が増えている。

山地での減少の一因はシカによる下層植生の減少とと思われます。環境省のモニタリングサイト1000の調査地にはシカにより下層植生が衰退している場所があり、そうした地域ではウグイスが減少しており、いなくなってしまう場所もあります(図5)。

低地での増加の原因はわかりませんが、東京都繁殖分布調査でも、低地での新たな記録が増えています(図6)。公園などの緑の増加、雑木林が利用されなくなったことでの藪の増加などがあるのかもしれません。また、場所によっては耕作放棄による藪化で、ウグイスの生息地が増えている可能性もあります。また、前述した山地の生息環境の悪化で、山地から低地への移動もあるのかもしれません。皆さんのまわりはいかがでしょう？ その他の主要種の状況やその変化の理由を含め、ぜひ情報お寄せください。

【植田睦之】

オオタカのモニタリングにご協力ください

オオタカが「国内希少野生動植物種」でなくなりました。このことがオオタカに及ぼす影響を明らかにするための情報収集をはじめました。オオタカの繁殖を観察されている方がいらっしゃいましたら、アンケートでの情報提供、よろしくお願いいたします。



オオタカ(小峯 昇)

オオタカが種の保存法から解除

2017年9月21日。オオタカが種の保存法に基づく「国内希少野生動植物種」から解除されました。かつてオオタカはレッドリストにおいて「絶滅危惧II類(危急種)」でした。それが「準絶滅危惧」になり、その状況が長く続いているため、ほかの種とのバランスから「国内希少野生動植物種」にしておくことが難しくなり、解除となったのです。

この解除はオオタカが絶滅に瀕した状態ではなくなったということで、喜ぶべきことなのですが、心配なことがいくつかあります。

1つは解除によってオオタカが減ってしまうのではないかということです。オオタカは2000年代にかけて各地で分布を拡げ、増加しましたが、その後、多くの地域でやや減少に転じているようです。解除で保護が緩むことでのさらなる減少が心配です。

もう1つはこれまでオオタカの存在によって守られてきた里山の保全の機能が弱くなってしまうことです。オオタカに代わる保全の枠組みがないのが現状です。

そして、国内希少野生動植物種でなくなることで、捕獲許可の権限が都道府県に移ります。オオタカがレース鳩を獲ってしまうということで、鳩愛好家からの有害捕獲の要請が出ていますが、これまで環境省は有害捕獲は許可を出していませんでした。しかし都道府県への移行により、簡単に有害捕獲が許可されないかも心配です。

必要なNGO中心のモニタリング体制の確立

そのため、環境省は解除後のオオタカの個体数の変化や保護状況の変化をモニタリングする調査をたちあげました。調査は5年を目処に考えているということですが、影響はこのような短期間で出るとは限りません。環境省事業が終わっても長期的なモニタリングができるような体制を今から考えておく必要があります。

そこで、この調査が終了した後も継続できるようなモニタリング体制として、皆さんが観察されているオオタカの状況を収集し、状況を把握する仕組みをたちあげました。この調査は日本オオタカネットワークなどのNGOとも連携して実施し、環境省事業が終わっても続けていけるようにします。

皆さんが観察されているオオタカの営巣地を登録していただき、それを可能な範囲で継続して観察していただき、それをもとにオオタカの動向を明らかにしていきます。ご協力いただける方は、以下のサイトにアクセスしてオオタカの繁殖状況を登録してください。

登録項目は、営巣地名、場所、営巣地の環境、繁殖の成否、失敗の原因等です。

来年度以降についても登録いただいた営巣地の名前をご連絡させていただき、その年の繁殖状況についてご報告いただくような仕組みにしていけたら、と思っています。ご協力よろしくお願いいたします。

アンケートサイト <http://www.bird-research.jp/1/otaka/>

【植田睦之】

全国鳥類繁殖分布調査ニュースレター 第12号

2018年 7月24日 発行

編集:植田睦之, 大島理恵, 大嶽若緒, 小峯 昇, 諏訪部幸子

© バードリサーチ・日本野鳥の会・日本自然保護協会・日本鳥類標識協会・山階鳥類研究所・環境省生物多様性センター

URL <http://www.bird-atlas.jp> <https://www.facebook.com/birdatlasjp> https://twitter.com/bird_atlasjp